

# 9月田原市議会傍聴記

①

## 地方政治クリエイト 伊藤 秀昭

9月定例田原市議会一般質問が4、5日に行われた。

議員任期が迫る中で、4年前に市民に約束した公約について、自らに問いかける責任ある締めくくりに議会活動を期待したい。

■オリンピック  
辻史子氏(公明)は今回もトップバッターで登壇し、2020年東京オリンピックにおけるホストシティ・タウン構想について取り上げ、

田原市が積極的に手を挙げ地域活性化に結び付けるべきと主張した。

キャンプ地を誘致する競技種目をこれから絞り込むという豊橋市と比べて、すでにトライアスロン合宿地誘致の活動も展開しており、何より1987年から伊良湖トリアスロン大会の半島あげの実践活動が心強い。

■花き産業振興  
仲谷政弘氏は花き

# 半年後の改選に向け、総仕上げを

田原市が積極的な手を挙げ地域活性化に結び付けるべきと主張した。

を中心とした施設園芸の活性化策について取り上げた。

経済動向に影響を受け消費動向が大き

く変化してきている中で、どのようにこの地場産業を発展させていくかは、この地域の生き残り策そのものである。

■PED対応  
昨年10月に豚流行性下痢(PED)がアメリカでの大発生に続き、日本でも沖縄県を皮切りに全国的に発生し、田原市にも被害を及ぼした。

被害を受ける口蹄疫は絶対に入れない覚悟で取り組むべきだ」と強調した。

こころであるが、フラワーアウトレットショップや輸出、国際園芸博などの議論を聞く限り、新たな展望を見いだすことはできなかった。

花を愛(め)で、花を贈る運動で低迷を脱することができ

「法定伝染病とか届出伝染病とかの問題ではなく、迅速な情報対応と万全の防疫体制が肝要であり、このことを教訓に地域全体が大きな

年、人口減少や地域活力の衰退が著しい赤羽根地区のまちづくりや海岸整備について質(た)だした。

なかでも弥八島周辺や半島で一番高い大山の整備について議論したが、観光資源としては「帯に短し、タスキに長し」

赤羽根活性

渡会清継氏は新田原市が発足して10

年、人口減少や地域活力の衰退が著しい赤羽根地区のまちづくりや海岸整備について質(た)だした。

なかでも弥八島周辺や半島で一番高い大山の整備について議論したが、観光資源としては「帯に短し、タスキに長し」

なかでも弥八島周辺や半島で一番高い大山の整備について議論したが、観光資源としては「帯に短し、タスキに長し」

観光資源の利活用についての都市建設部長の答弁は歯切れが悪かった。

1979(昭和54)年に転勤でこの地に赴任して営業で優美半島を担当し、初めて弥八島周辺を訪れた時に雄大な光景に

感動し、併せて周辺の観光開発計画も聞いた。あれから35年が経過して、海岸は整備されたが、周辺環境はむしろ廃れているのではない

か。

政策推進部長は「活力の源である地域まちづくり事業を維持していくためにも、定住人口の定着に政策を総動員して取り組みたい」としたが、三方を海とす



荒木氏は自治体消滅論に真っ向から取り組むべきではないかと強調したが「全てのまちは救えない」もまた事実だろう。むしろ、人口減が前提のまちづくりに取り組むべきではないだろうか。

「日本創生会議が条件のなかで、188平方キロ、人口6万2000人のまちな生き残り策は容易ではない。